

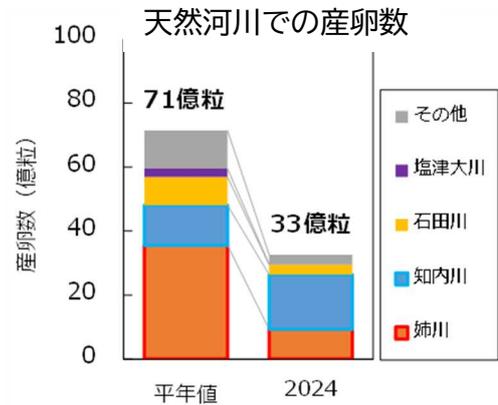
令和7年(2025年)6月11日
第1回滋賀県環境審議会琵琶湖保全再生部会
農政水産部水産課

アユの資源状況と資源維持に必要な対策

1. 今期(2024年生まれ)のアユ資源状況

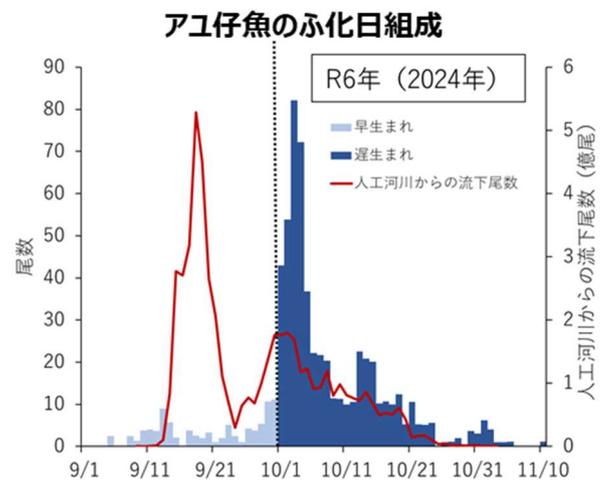
①天然河川と人工河川での産卵状況

- ・天然河川での2024年の産卵数は32.6億粒(平年比45.7%)となり、姉川での高水温による産卵不調が見られた。
- ・人工河川では、アユ親魚を20t収容(当初12t+補正8t)し、52.1億尾のふ化仔魚を流下させた。



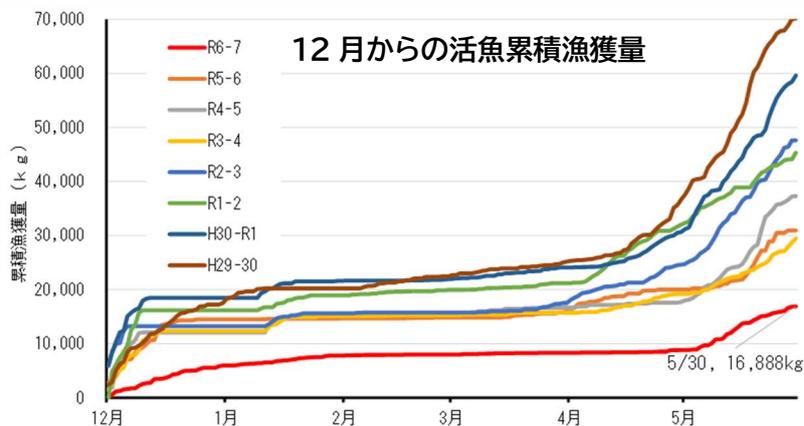
②琵琶湖へ流下したアユ仔魚の状況

- ・琵琶湖で育つアユ仔魚のふ化日組成は10月上旬生まれが多く、12月からエリでの漁獲対象となる9月生まれは少なかった。
- ・琵琶湖へ流下直後のアユ仔魚の餌となるプランクトンの発生が少なく、9月生まれのアユの成長、生残が低かった可能性。



③2024年12月以降の漁獲状況

- ・上記の結果、令和6年12月からのアユ苗漁獲状況は非常に低く、過去最低で推移している。
- ・5月上旬からは一部の地域で漁獲が上向き、北湖南部のエリでは6月にかけて1漁協あたり60~190kg/日の水揚が続いている。一部のヤナでは5月中旬から100kg~800kg/日以上漁獲がある。
- ・ただし、獲れ具合は地域によりばらつきがあり、北部のエリなどでは不漁が続いている。



➡2024年は産卵期の姉川の高水温、9月の琵琶湖でのアユ仔魚の餌不足が、記録的な不漁につながったと考える。

2. アユ資源維持に必要な対策

① 来期アユ漁業を支える資源の確保

○ 人工河川に収容する親魚の追加

・産卵期の河川水高水温による産卵数の減少が危惧されることから、人工河川への産卵用アユ親魚収容量を、当初の12トンに6月補正で8トン追加を予定。



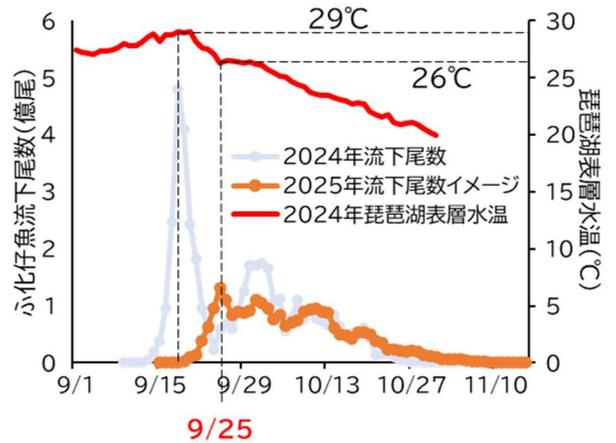
② 琵琶湖の高水温や餌不足に対して

○ 人工河川の運用改善

(アユ仔魚流下タイミングを遅らせる、分散させる)

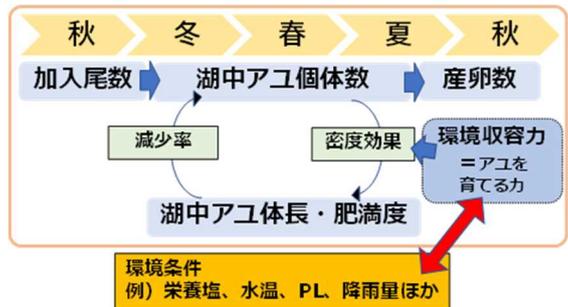
・2023、2024年の琵琶湖水温推移から平年並みの26℃以下となる9/25以降に最初の流下ピークとなるよう、親魚の放流開始を例年より1週間遅らせる。
 ・なだらかな流下ピークとなるよう収容時期を調整し、リスク分散を図る。

人工河川からのふ化仔魚流下イメージ



○ 漁場生産力の評価と回復手法の検討

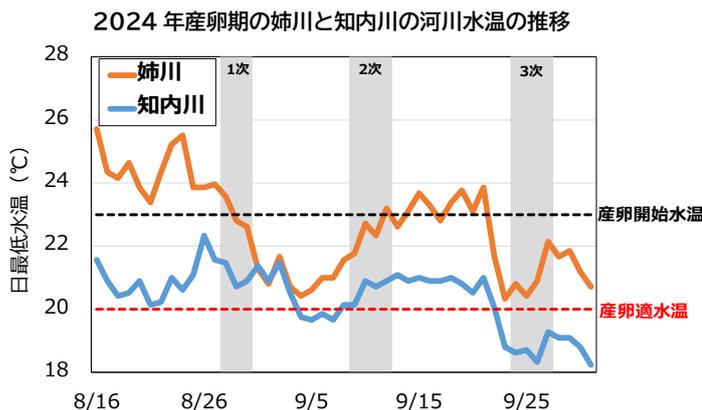
・水産試験場によるアユ資源の蓄積データから、アユ生活史モデル(=アユの成長・生残を表現できる数式)を構築し、環境収容力と環境条件(水温、プランクトン、栄養塩等)との関係进行分析。
 ・現在の沖合の漁場生産力を評価するとともに、漁場生産力が不足する時期や項目を抽出し、その回復手法を検討する。



③ 産卵期の河川高水温に対して

○ 常水河川で比較的水温の低い知内川等での産卵場造成

・地元漁業者を中心とした活動組織と連携して河床耕耘を実施し、産卵適地を拡大する。



これらの対策により、来期アユ資源の安定・維持を図る。